

生態系を活かしたまちづくり

Keywords : 都市緑地, 里地里山, グリーンインフラストラクチャー, 保全生態学, 環境教育

◆研究概要

これまで、造園学や緑化工学、植物保全生態学を専門として、都市や里地里山、湿地などの様々な自然環境の保全や創造に関する研究を行ってきました。

都市緑地に関しては、自然環境のポテンシャルを活かした緑地計画に資する研究として、緑地の配置や構造と種多様性の関係の解明、過去の植生景観と資源利用、都市緑地の心身の健康への寄与などの研究を行ってきました。

また、里山や水田、湿地など地域の自然環境の保全や再生に関する研究も行ってきました。特に、水田や湿地の研究では、琵琶湖、京都府の巨椋池干拓地、滋賀県の谷津田、東南アジア・ラオスの天水田など様々なフィールドを対象としてきました。

これからは地球温暖化に伴う自然災害増加への適応策として、緑地や湿地などのグリーンインフラストラクチャーを活かしたまちづくりについても考えていきたいと思っています。

■研究テーマ

1. 生物多様性に配慮した都市緑地の配置と管理

都市の生物多様性は、レクリエーション、災害防止、地域文化の育成など、直接的または間接的に私たちの暮らしを支えています。一方で、様々な人間活動の影響を受けて都市の生物多様性は損なわれ続けています。生物に配慮し、生態系を活かしたまちづくりに向けて、景観生態学的手法を用いた都市緑地の配置に関する研究や都市緑地の重要な要素の一つである社寺林の管理、都市緑地の健康づくり・医療の分野への活用について研究してきました。これからは生態系を積極的に活用した防災・減災のまちづくりも考えていきたいと思っています。

環境・まちづくり系専攻

エコロジカル・ランドスケープ研究室

准教授

いまにしあゆみ

今西亜友美

imanishi@socio.kindai.ac.jp



<http://www.ne.jp/asahi/homepage/junichi/ayumi.html>

<http://researchmap.jp/aimanishi>

<http://www.kindai.ac.jp/sociology/staff/environment/>

2. 水田の草本植物多様性の保全と再生

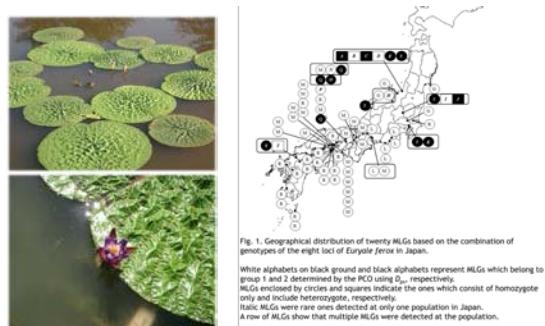
ラムサール条約 COP10 以降、水田の生物多様性保全機能が注目されています。東南アジア・ラオスの天水田地帯、京都府の巨椋池干拓地、滋賀県甲賀市の谷津田など様々なフィールドで、水田や畦畔に生育する草本植物の保全・再生手法について、埋土種子の利用も含めて、検討しています。



ラオスの水田と、市場で売っていた水田雑草

3. 絶滅危惧植物オニバスの保全生態学的研究

ため池のシンボル種である浮葉植物オニバスの保全に向けて、種子の休眠・発芽特性や遺伝的変異の地理的分布などを調べています。



オニバスとその遺伝的変異の地理的分布

4. マメ科在来植物の外国産種子を用いた緑化による遺伝的攪乱リスクと適正利用

●論文・作品・表彰・特許等

1. Imanishi, A., Kaneko, S., Isagi, Y., Imanishi, J., Natuhara, Y. and Morimoto, Y. (2015) Genetic diversity and structure of *Euryale ferox* Salisb. (Nymphaeaceae) in Japan. *Acta Phytotaxonomica et Geobotanica* 66(1): 1-9.
2. 今西亜友美 (2015) 攪乱に適応して生き延びてきた田んぼとその周辺の植物たち. 夏原由博編. 「にぎやかな田んぼ イナゴが跳ね、鳥は舞い、魚の泳ぐ小宇宙」, pp. 118-125. 昭和堂, 京都.
3. Imanishi, A. and Imanishi, J. (2014) Seed dormancy and germination traits of an endangered aquatic plant species, *Euryale ferox* Salisb. (Nymphaeaceae). *Aquatic botany* 119: 80-83.
4. 2006年3月23日：博士（農学, 京都大学）
5. 日本造園学会ベストペーパー賞「滋賀県南東部の水田地帯におけるハルリンドウ生育地の環境条件」平成二十四年度公益法人日本造園学会全国大会研究発表会, 2012年6月.

▲趣味

山登りや自然観察、裁縫やお菓子作りが好きです。ただ、最近は仕事、家事、育児で手一杯でどれもなかなかできません。そのため、今の一番の趣味は、趣味の時間をつくり出すために最も効率的に仕事や家事をする方法を追求することです。

◆研究室の宣伝

気候変動や人口減少が続く日本において、持続可能なまちや社会を創るには、自然をコントロールするのではなく、自然の仕組みや機能を理解し、自然を活かす考え方が不可欠です。一緒にフィールドに出かけて生物・自然に触れ、これから社会に本当に必要なものは何か考えてみませんか。

道路の新設等に伴って生じる人工斜面(のり面)の緑化において、在来植物の利用が推奨されています。しかし、種が同じであれば種子の採取地は問わなかったため、緑化に使用される在来植物の種子の99%は中国などの外国で生産されています。肥料木として緑化現場で外国産種子が多用されるマメ科植物を対象として取り上げ、外国産種子による緑化の遺伝的攪乱リスクを評価すること目的としています。

5. 大学生を対象とした環境教育の実践

生物や環境の保全には、人々の理解が不可欠です。大学の授業でプロジェクト・ワイルドという環境教育プログラムを取り入れ、能動的に生物・環境について考え、行動できる人材の育成を試みています。